

## 小詩會詠草 : 和歌 : 文苑

|             |                                                                               |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| 著者          | 天山, 芒村, 夕闇                                                                    |
| 雑誌名         | 龍南會雜誌                                                                         |
| 巻           | 102                                                                           |
| ページ         | 39-41                                                                         |
| 発行年         | 1903-11-25                                                                    |
| その他の言語のタイトル | 小詩会詠草 : 和歌 : 文苑                                                               |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2298/5626">http://hdl.handle.net/2298/5626</a> |

瀟心に浮ぶ極葉艦

そよ風ふきて波たちぬ

波の漣消を行けば

またも静かに秋の色

芹の根洗ふ眞清水を

掬ひて寒き月の影

はやも端山にかくれ行く

はやも山邊は夜の暗

百舌鳥なきて露曉れぬ

櫓の下道調とりて

行くは逝く世に心なき

うかれ男の埒なさよ

有心の我と無心の秋

闇物みなを覆ひ去り

物みな闇にかくれ行く

さても思の長きかな

和歌

小詩會詠草

○

天

山

默念の夜は更けはてし月落ちぬおのづからさく松風のこゑ  
更くる夜を聖書なかに火になげてただそら仰くまどひの子われ  
砂にねてはや子とびとぶ夕川の彩うすれゆく雲の影みる  
森の夜をあぐみつとむるまどひの子零一つのひざにつめたき

紫の雲の上よをみしは夢さむればさはる人の世のまぬ  
 いまのかねたらぬ一つはゆるせ人神のさづけし戀ぞもたぬぞ  
 いつはりのそのかりの名よ戀ぞとよ仰げ盡きせぬ天の美地の美  
 はとまばしめぬてひじりは里に出でぬ秋風さびし谷のほらあな  
 るのはなに歌はと君のとひまさむさきぬとのみは文に記さじ  
 夕雲のきゑゆく彩のろをろにもわすれし憂また刻みくる

○

芒

村

しかすがにゆかしき夢のさりぞともやがては消ゆるふる里のかげ  
 さすらふに園に花あり匂ひありさびしさなくに秋ふけてゆく  
 まゆあけて世をのゝじりし若人がおくつきのあたり萩ぞみだるゝ  
 夢深きいづこもたゑの里ならぬひとりまよひし吾若かりき  
 蘆の葉の風にみだるゝひとゝきにうしはみなぎる利根の夕暮  
 木犀の花の香高き園にして昔の夢をしのび見しかな  
 かくながらひとりたゝすむ若き子のぬかに輝やくゆふづゝのかげ  
 風のたぬまをひよく鐘の音に月落ちかゝる木曾の山みち  
 つくばねの峯にさまよふ白雲のかげやはのかにたそがれにけり  
 賤の男がまきつみかへるやせ馬のたてがみ寒く秋の風ふく

○

夕

關

聖燭みかどにこの胸てらす神なきかわが世のやみのやみとこしへに  
 まだわかき幸まきある夢に眠りたる稚子よさめずや春なり曉あけなり  
 經ひりとびて聖者ひりをしのぶ山寺や秋くれ方の風の音たかき  
 ふるきずを風にふかせてものふが駒のり入るゝ秋の草原  
 あへかにも梢わかるゝ日の影に似たりや君が死出のひとふし  
 なゝとせを流れ流れてまたこゝに古里の野の草に興する  
 いにしへの神のつるぎのしたゝりに形なりし國詩の國ならす  
 詩集とりて桃の林にわれ立てばくれのうすもやわれをつゝみぬ  
 月つききよき棕せ枯の木かげのゆきもどりさやぎに落つる露うけて見る  
 闇に入らば闇にしたがひ日に入らば光に化ひせむわが身まよなる

漢詩

曉 獵

兒 島 星 江

早曉出郭門。繁霜被野草。邱墟多寒色。卉木盡枯槁。乘弓且佇立。翻身迎飛鳥。一箭中黃鵠。  
 再箭蒼鷹探。笑而向西風。殘月懸樹杪。

湖村小隱曰。結構頗近王給事觀獵五律。乘弓一節則自少陵野老得來。轉落處筋脈整然。方不板滯。